

横浜市立 旭小学校

学校評価報告書

( 令和 元 ~ 3 年度 )

| 重点取組分野           | 令和 元 年度   |   | 総括 |
|------------------|---|---|----|
|                  | 具体的取組   | 自己評価結果  |    |
| 児童生徒指導           | ①配慮を要する児童に対して教員がチームとなって迅速に対応できるよう、週1回の情報交換会で児童についての情報共有を行う。②学校スタンダードを共有し、全教職員が同じスタンスで指導することを徹底することで、児童の規範意識を育て、落ち着いた学校生活を送ることができている。  | 児童指導委員会を中心に、学校スタンダードを学校全体で共有し、児童支援体制の充実に取り組んできた。支援を必要とする児童が多数いることで、行き届かない部分があった。限られた人数でよりよい支援を行えるように検討している。   | C  |
| 豊かな心             | ①「スマプラ」の活動を充実させ、遊びの交流や集會等を通して異学年とのかかわりを深める。②気持ちのよいあいさつや協力し合う態度を大切に、児童がよりよい行動を選択し実践できるように、給食や掃除、休み時間の関わりなどの様々な機会に声をかけ支援していく。   | 縦割り活動の中で、高学年だけでなく中学年児童にも明確な役割を設定した。中学年児童も、異学年交流の中で自分ができることを進んで行う姿が増えた。児童会で「あいさつ」を呼びかけ、挨拶チェックを年間を通して行ったことで、挨拶への意識が高まった。しかし、自発的な挨拶までにはさらなる努力が必要。                          | B  |
| 特別支援教育           | ①様々な課題に対して、ケース会議等を通して教員がチームとなって問題解決に臨み、よりよい対応を心がける。②学校で解決が難しい場合は、諸機関(児童相談所・区役所など)や専門機関(地域療育センター・医療機関・通級指導教室・学校カウンセラー・特別支援学校など)と連携を図る。   | 今年度も、関係機関と連携した対応をとってきた。区や児相他と情報を共有し、カンファレンスを行ったことが、児童への日頃の支援に活かされた。課題であった合理的配慮についても、委員会やSCと連携して支援することで、保護者の理解を得ることができた。   | B  |
| 確かな学力            | ①各教科で身に付けたい力を明確にして授業を組み立てることで、「分かる」授業づくりを進めるとともに、子どもの「つまづき」に対応できるよう指導と評価の一体化を図る。②自他の思いや考えを交流する場面を大切に、児童が自ら表現し考えを深めたり広げたりできるよう授業改善を図る。   | 今年度の重点研究を「自分も友達も大切に育てる子の育成」を研究主題として道徳で行った。道徳の指導に不安を抱えている教諭もあり、講師の方から抱えていた授業前の種まきや発問の工夫についての助言は、道徳の授業づくりに直接生かすことができるものであった。  | B  |
| 健やかな体            | ①年間2回の学校保健委員会で「目標設定・各学級での実践・まとめ」を計画的に行うことで、児童が健康を自分事として捉え、自分の生活習慣を見つめ直す機会とする。②一校一実践運動の中で「集団での遊び」や「1人でできる遊び」を紹介したり、各種運動週間を設けたりして運動への関心を高める。  | 「学校生活を気持ちよく安全に過ごすためにできること」を全校で取り組んだ。衛生面や体力向上に向けて、学級の取り組みに加え保健委員会児童からの提案も行い、全校児童の意識向上に努めた。特に、こみのりについて保健委員会児童が説明会を開いたことで、全学級で分別の意識が高まった。                                  | B  |
| 安全管理             | ①緊急事態が実際に発生したことを想定した安全訓練や教職員研修を行ったり、危機管理マニュアルを徹底したりすることで教職員の危機管理意識を高める。②児童が安全に登下校できるよう、道路の歩き方について保護者・地域と協働しながら指導し、児童一人ひとりの安全への意識を高める。   | 安全訓練の事前指導を発達段階に応じた内容で行うことを徹底し、教師・児童が目的意識をもって訓練に臨むようになった。真剣に訓練に臨む雰囲気できた。登下校における安全な歩き方を意識させるために、地区班安全学習を前後期で行った。学習したことを実行する意識を高めるために、さらなる指導が必要である。                        | B  |
| 地域連携             | ①「まち」とともに歩む学校づくり懇話会のメンバーと中期学校経営方針を共有し、年間3回の懇話会を意見交換する中で成果と課題を明らかにし、改善を図る。②学校ホームページを随時更新し、学校での取り組みを家庭・地域に迅速に知らせしていく。   | まち懇の2回目を土曜参観日に設定した。児童の学校生活を直接見てもらった上でいただいた中間の評価を学校経営の改善につなげることができた。②学校ホームページを随時更新している。更新後、すぐに閲覧数が増えるのも、学校への関心の高さからだと考える。学校評価アンケートでも好評であった。                              | B  |
|                  |   |   |    |
| いじめへの対応          | ①週1回の情報交換会と学年研等で小さなことでも見逃さず、いじめの早期発見と早期解決のために、保護者と協働しながら教職員がチームとなって迅速に対応する。②重点研究を道徳科で行い、豊かな人間関係の中で、児童に自分自身や友達を大切にすることを育てていく。  | 「いじめ防止基本方針」に従って、いじめの防止・早期発見に努めた。豊かな学級風土づくりに向けて、いじめ防止についての職員研修を行ったり、道徳の授業の充実を図ったりしている。毎週の情報交換会で、児童についての情報を共有し、職員全員で対応してきた。   | B  |
| 人材育成・組織運営(働き方改革) | ①授業力や児童指導力向上のため、教職員が各種研修、研究会に参加しやすい環境を整備する。②メンターチームを5年次以下の教職員を中心に組織し、メンバーの必要感や自主性が生かせるよう充実した内容となるよう工夫するとともに、ミドルリーダーがメンターチームに積極的に関わる体制を作る。③教職員がゆとりをもって子どもたちに向き合えるよう業務内容を見直し、業務の効率化を図る。   | 教職員の働き方改革を進めるため、会議の精選・効率化、個人の意識改革に取り組んできた。改善の余地はまだまだあるが、学校として大切にしていきたいことを教職員全員が共通理解した上でスピード感をもって改革を進めていく必要がある。メンターグループが計画的に研修を行っている。必要に応じてミドルリーダーから助言も受け、中身の濃い研修になっている。 | B  |
| ブロック内評価後の気付き     | ・ブロック内の全小学校が異学年交流を大切にしている。小学校での異学年交流の経験が、中学校での異学年交流の基となり、寺尾中学校の生き生きとした雰囲気につながっている様子である。<br>・寺尾中学校では、生徒に人権意識を育てるために様々な取り組みが行われている。「バーンゲーム」等、小学生でもできる取り組みを紹介していたので、取り入れていきたい。<br>・東台小学校で取り入れている教科担任制は、特別な配慮を要する児童が増えている本校においても有効な指導方法だと考える。           |   |    |
| 学校関係者評価          | ・地域連携を進めていく上で、まち懇の第2回目を土曜参観日に行うことは大変有意義であった。特にスマプラ活動は、兄弟姉妹が少なくなっている昨今、異学年の子ども同士が関わりながら思いやりの心を育てるのに有効。<br>・子どもたちが具体的な場面に話しながら道徳的価値を学んでいく道徳の授業はとてもよい。<br>・教職員が配慮が必要な児童に対し、情報を共有して指導にあたっている姿がとてもよい。<br>・公園などで遊んでいる子どもたちの様子を見ると、マナーを守れている子と守れていない子がいる。学 |   |    |

| 重点取組分野           | 令和 2 年度  |   | 総括 |
|------------------|--|---|----|
|                  | 具体的取組  | 自己評価結果  |    |
| 児童生徒指導           | ①学校スタンダードを共有し、全教職員が同じスタンスで指導することで、児童が規範意識をもち安心して学校生活を送ることができるようになる。②週1回の情報交換会で児童についての情報共有を行う。③様々な課題に対して、教員がチームとなって問題解決に臨み、よりよい対応をこころがける。                                   | 児童指導委員会を中心に、学校スタンダードを学校全体で共有し、児童支援体制の充実に取り組んできた。支援を必要とする児童が多数いることで、行き届かない部分があった。限られた人数でよりよい支援を行えるように検討している。   | B  |
| 豊かな心             | ①縦割り活動を充実させ、遊びの交流や集會等を通して異学年との関わりを深める。②昨年度に引き続き、道徳教育の研究を行う。確かな価値把握をするために発問構成に着目して研究を深めていく。③学校行事、各活動を通して、互いのよさを認め合い、合意形成して活動を作り上げていけるよう支援していく。                              | 今年度は、活動が制限され縦割り活動や交流道徳の研究など行うことが難しくなった。しかし、運動会のめあてで異学年のよさを認めることを狙ったことで、異学年の交流が生まれた。また、校外学習を実施し、グループ活動で合意形成を促す場面をつくり互いのよさを認め合える場面をつくってきた。今後も行事を通して、成長            | B  |
| 特別支援教育           | ①配慮を要する児童について教職員全体で情報を共有し、全職員がチームとなって対応する。②校内で解決が難しい場合は、諸機関(児童相談所・区役所など)や専門機関(地域療育センター・医療機関・通級指導教室・学校カウンセラーなど)と連携を図りよりよい対応をこころがける。   | 職員全体で児童についての情報を共有し、児童一人ひとりに必要な配慮を行えるよう努めた。児童の気持ちに寄り添った支援を行えるよう、特別支援研修を行った。また、校内だけでは解決が難しい場合は、諸機関と連携を図り、よりよい対応を目指している。   | A  |
| 確かな学力            | ①新しい教育課程のもと、各教科で身に付けたい力を明確にして授業を組み立てることで、「分かる」授業づくりを進めるとともに、子どもの「つまづき」に対応できるよう指導と評価の一体化を図る。②重点研究においては、道徳の振り返りの充実を図るため、「確かな価値を把握するための発問構成」について研究を深める。                       | 今年度は感染症の感染予防の観点から、グループ学習や体験を通じた学習が制限された場面が多くあった。そのため、深め合いが十分であったとは言いがたい。しかし、そのような狭まれた範囲の中からできることを見つけて教育活動を行うことができた。   | B  |
| 健やかな体            | ①年間2回の学校保健委員会において、「目標設定・各学級での実践・まとめ」を計画的に行うことで、児童が健康を自分事として捉え、自分の生活習慣を見つめ直す機会とする。②一校一実践運動を全校に周知し、集団での遊びや三密などの言葉の意味を再確認し、行動に移そうと意識が高まる。                                     | 「手洗い・うがい・あいうべ体操で感染症に負けない習慣を身に付ける」ことを全校で取り組んだ。学級の取り組みに加え、保健委員会児童からの提案も行い、全校児童の意識向上に努めた。ソーシャルディスタンスや三密などの言葉の意味を再確認し、行動に移そうと意識が高まった。                               | A  |
| 安全管理             | ①緊急事態が実際に発生したことを想定した安全訓練や教職員研修を行い、危機管理マニュアルを確認し、徹底することで教職員の危機管理意識を高める。②児童が安全に登下校できるよう、道路の歩き方について保護者・地域と協働して指導し、児童一人ひとりの安全への意識を高める。③校舎内での過ごし方を確認し、安全に生活できるようにする。            | 月に1度の安全訓練を計画し、感染症対策として学年を分けて集まる人数や通路を通る人数を減らすようにして実施した。状況により、例年ほどの回数は実施できなかった。また、児童の安全な登下校のために、保護者と連携して地区班安全学習を行い、通学路の安全な歩き方や集合の仕方を確認した。                        | B  |
| 地域連携             | ①「まち」とともに歩む学校づくり懇話会のメンバーと中期学校経営方針を共有し、年間3回の懇話会を意見交換する中で成果と課題を明らかにし、改善を図る。②学校ホームページを随時更新し、学校での取り組みを家庭・地域に迅速に知らせしていく。  | 今年度は、まちとともに歩む学校づくり懇話会の開催ができず、地域の方と方針を共有することは難しくなった。学校ホームページでは月ごと更新し、各学年の学習や生活、行事の様子をお知らせすることができた。学校だよりの形式が変わったが、情報が整理されてよいという評価もいただいた。                          | B  |
|                  |  |   |    |
| いじめへの対応          | ①週1回の情報交換会と学年研等で小さなことでも見逃さず、いじめの早期発見と早期解決のために、保護者と協働しながら教職員がチームとなって迅速に対応する。②重点研究を道徳科で行い、豊かな学級風土の中で、児童に自分自身や友達を大切にすることを育てていく。   | 児童についての情報を学校全体で共有し、いじめの防止・早期発見に努めた。いじめが疑われた場合には、迅速にいじめ防止対策委員会を立ち上げ、対応を行ってきた。いじめ防止の職員研修を行い、児童と保護者の気持ちに寄り添った対応を行えるよう心がけた。   | B  |
| 人材育成・組織運営(働き方改革) | ①授業力や児童指導力向上のため、教職員が各種研修、研究会に参加しやすい環境を整備する。②メンターチームを5年次以下の教職員を中心に組織し、メンバーの必要感や自主性が生かせるよう内容を工夫するとともに、リーダーがメンターチームに積極的に関わる体制を作る。③教職員がゆとりをもって子どもたちに向き合えるよう業務内容を見直し、業務の効率化を図る。 | メンター研では、ミドルリーダーが中心となって授業力向上につながる研修を計画、実践していた。積極的に初任者へのアドバイスをする姿勢も見られ、学び合う風土を感じた。業務内容については、できるだけ精選し、授業や児童指導の時間や準備に充てられるようにしたが、引き続き教職員が共通理解しながら業務の効率化を進めていく必要がある。 | B  |
| ブロック内評価後の気付き     |  |   |    |
| 学校関係者評価          |  |   |    |

| 重点取組分野           | 令和 3 年度  |   | 総括 |
|------------------|--|---|----|
|                  | 具体的取組  | 自己評価結果  |    |
| 児童生徒指導           | ①全教職員が全児童に共通した指導を行えるよう共通理解を図る。そのためにテーマを絞った研修を重ね、意識を高める。②特別支援教育の視点をもって指導に当たることが重点として取り組むことを確認し、児童の情報を共有する。担任する児童だけでなく、全職員が子への支援を可能にする。  | ①共通した指導の根幹に当たる学級経営の在り方について実践家を講師を招き、研修を行った。②特別支援教育の視点について、指導主事を講師を招き、研修を行った。①②いずれも意識高揚に効果があったものの、全職員での情報共有による児童指導には至っていない。                              | B  |
| 豊かな心             | ①コロナ禍の昨年度に実施が不十分だった縦割り活動については、2学年ごとのブロックでの活動を基本線に年間を通して実施し、上半年、下半年児童それぞれに学びがあるように工夫する。②授業を通じて情操を育成することを重視し、児童間の関わり合う場面を保障して、心をはぐくむ。  | ①コロナ禍で小規模ではあったが5月に全校遠足、11月に縦割り活動を行った。上下学年での学びの場を保障することができた。②ガイドラインでの制約もあり、部分的に学び合いの場設定を行うことができたが、継続実施が難しく、授業での日常化には至っていない。                              | B  |
| 特別支援教育           | ①配慮を要する児童については、教職員全体で共有し、関係機関との連携を図りながら指導のばたつきによる不安を生じないように努める。②配慮を要するかどうかにかかわらず、全児童の個を大切にすることを共通理解のとも、児童のよさに着目して伸長を図る指導に取り組む。   | ①児童支援専任を中心とした、職員間での児童理解における意識高揚につながった。個を大切にすることを指導が浸透しつつある。②まだ第一斉型の授業が少ないが、個別指導を取り入れる授業が多くなってきている。  | B  |
| 確かな学力            | ①特定の教科に偏ることなく「資質・能力」を育成するための授業づくりを目指す。研修や授業を伴う研究を定期的に配置しながら推進し、児童が自ら考えを上げる授業づくりを目指す。②教材研究に力点を置き、楽しい、わかる(できる)授業づくりを目指す。   | ①「資質・能力」を育成するための授業については途上だが、同僚の授業からヒントを得ようとする教職員が多く、授業づくりに対する意識の高揚がみられる。②自作教材を用いて児童の実態からスタートする授業づくりを進める教職員が多くなってきた。                                     | B  |
| 健やかな体            | ①一校一実践については、コロナ禍でも実践可能な運動を探り、児童委員会活動の中で定期的に集会を開催するなどして運動の日常化を図る。②学校保健委員会において全校児童に働きかけて「感染症に負けない心と体」をテーマに全校で取組を展開する。年間2度の発表の場をもち、共有する。  | ①一校一実践については、コロナ禍の制約が足かせとなり、継続的な実施ができなかった。②学校保健委員会の活動については計画的に展開してきているが、児童が自ら課題を設定し解決する活動には至っていない。   | B  |
| 安全管理             | ①昨年度完全実施できなかった避難訓練については、コロナ禍であってもできる方法を見出し、有事における行動につながるよう計画・実施する。②登校班制度の充実を図るために内容を点検し、成果と課題を洗い出して保護者・地域の協力を仰ぎ改善を図る。  | ①避難訓練については、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置期間を除き、その時期に可能な内容に精選、縮小して実施することができた。②登校班制度における課題を洗い出し、PTA校外委員会と連携して次年度開始時より改善策を立案した。   | B  |
| 地域連携             | ①昨年度実施を見送った授業参観、懇話会については、方法を模索しながら実施の可能性を探る。120周年記念式典開催を予定しており、感染拡大状況に適切に方法で実施する。②次年度に「学校運営協議会」を開設することを念頭に、地域との情報共有を図る。WEBページを積極的に更新する。  | ①懇話会や説明会については、公式YouTubeチャンネルを活用して非集合型の方法で実現した。感染が小康状態時には、保護者を分散して来校する形態で参観を実施した。②WEBページの更新は高評価だが、地域の方々との連携は皆無に等しく、方法を模索したい。                             | B  |
|                  |  |   |    |
| いじめへの対応          | ①現在のいじめ認知システムをよりよいものにしていくために、校内での認知方法を見直し、全教職員の感度を上げるよう努める。②児童支援専任教諭を中心とした組織構造を確立し、第一に未然防止、第二に早期発見を合言葉に全教職員でもかかわらず大きなトラブルを防ぐことができた。  | ①いじめ認知の方法や考え方について教職員間での周知徹底を図り、早期発見や迅速な初期対応に努めた。②児童支援専任を中心とした組織を安定化させ、学年代表者との情報共有を綿密に行ったことで、認知件数が増えただけでなく、未然防止、第二に早期発見を合言葉に全教職員でもかかわらず大きなトラブルを防ぐことができた。 | A  |
| 人材育成・組織運営(働き方改革) | ①「教職員の元気が子どもの元氣」をスローガンに、一部の職員に偏らない業務分担、児童下校後時間帯の有効活用、会議の精選を目標に「負担を軽減しても教育の質を落とさない」組織改革に向けて課題を洗い出した。主幹教諭を中心に課題解決に当たる方向性を確認した。②教師の指導力向上について学びを求めた傾向が高まり、自主的に学ぶ教職員が増えた。   | ①一部の職員に偏らない業務分担、児童下校後時間帯の有効活用、会議の精選を目標に「負担を軽減しても教育の質を落とさない」組織改革に向けて課題を洗い出した。主幹教諭を中心に課題解決に当たる方向性を確認した。②教師の指導力向上について学びを求めた傾向が高まり、自主的に学ぶ教職員が増えた。           | B  |
| ブロック内評価後の気付き     | 人権教育推進ブロックを拝命していたが、その活動についても中止が相次ぎほとんど実施できておらず、具体的な評価を得られていない。今後、次年度の改革方針を発信することでブロック内での評価を誘発し、学校運営に反映させていきたい。   |   |    |
| 学校関係者評価          | 学校関係者評価については、今年度内に次年度発足予定の学校運営協議会当初委員の人選を兼ねてお話を伺う計画であったが、コロナ禍における行事への招待見合わせにより、協議会の発足のものも7月に先送りした。11月に開催した創立120周年記念式典にきていただいた一部の方からは、式典そのものの実現に高い評価をいただいたが、学校運営全般に関する情報を得られていない。次年度の協議会発足により、関係者評価を進めていく計画である。 |   |    |

**中期取組目標振り返り**  
今年度から「教職員の働き方改革」に本格的に着手した。各種会議の効率化をはじめ、職員室の整理整頓など教職員の意識改革も進んでいる。児童指導委員会中心に、週に1度の情報交換会をするなど組織として対応しようとしていたが、実際には支援が必要な児童の数が多く、しっかりと対応しきれない状態になってしまった。教員一人ひとりの指導力を向上するとともに、学級担任一人でいろいろなことを抱え込むことなく、学年として学校としてしっかりと児童支援体制を整えることが必要である。

**中期取組目標振り返り**  
いろいろな制約がある中で、教育活動についてそれぞれの担当で考え、話し合い、運営することができた。働き方改革は2年目となるが、前年度同様、児童指導に時間を割くことが多い現状では、組織としての方針や対応の仕方を立てていっていない。働き方改革の必要感や自主性が生かせるよう内容を工夫するとともに、リーダーがメンターチームに積極的に関わる体制を作る。③教職員がゆとりをもって子どもたちに向き合えるよう業務内容を見直し、業務の効率化を図る。

**中期取組目標振り返り**  
次年度には、ダブルスタメン化している組織の抜本的な再編に加え、「子ども」を主語にした学校づくりに、全教職員が「創り手」マインドを推進する土台ができた。主幹教諭の主体的な学校運営を核に、全教職員が「創り手」であることを前面に出して、大がかりな改革を進める。幸い、WEBやSNSを活用した学校の状況発信に対して、保護者や学校関係者から高い評価をいただいているので、改革の具体をどんどん発信し、その反応に即してPDCAサイクル、改革の質を求めている。